夢窓幼稚園通信第61号

2018年 11月 30日

「しろい　おつきさま！」この何日かの間だけでも、何度か子どもたちの声に出くわし、思わず月を探しました。
空を見上げる瞬間は、特別なひと時です。
忙しくバタバタとしている時でも、広い空の下で生かされていることを感じられ、一瞬深呼吸をさせてもらえます。
そんな空は、最近もう本当に日が暮れるのが早くなり、冬至までまだひと月もあるというのに5時にならない内に、星をいくつかかぞえられるくらいです。

「いちばんぼーし　みーつけた！」
そう叫ぶ子に聞いてみたら、「はじめに見つけて　誰かに教えてあげたい！」のだそうです。
空に浮かぶ月……昼間の白いのでも、大きく輝き昇る見事なのでも、そしてまた澄んだ空にぴーんと光る星々でも、確かに誰かに教えてあげたくなるものですね。
仰ぎ見る"空見"の特別な時間のよろこびは、日々変わりしかしくり返される月の光の今日という日のかけがえのなさを、そして無数の星々のひとつひとつとしての特別な光の深い意味を体験する祝祭事であるからなのでしょう。

星々や月を　私たちは見上げます。
星々や月も　私たち一人ひとりを空高くから見つめてくれているのかもしれません。
おだんごを作る子どもたちを、小さな子の頭をなでてかわいがるちょっぴり歳上のお姉さんを、イタリアからやってきたお姉さんのお客さまにハイタッチにかけてくる姿に、転んで泣きながら立ち上がる勇気に、大人の今日の頑張りに……、目を細めて微笑んでいてくれているような気がします。
ひとつひとつ　かけがえのない　地上の輝きとして！

見上げる天空と私たちの過す母なる大地は、互いに意味深く結びついているのでしょう。
大地は人間がその歴史を通して行ってきたこと（そのどう仕様もない営みも含めて）と、共にあることを覚悟してくれました。
その地球にキリストが光を射し込み寄り添ったのです。
クリスマスは、天空と大地とが強く結びついた証しでもあるのだと思います。

園長　升光泰雄